

宮紀子著

『モンゴル時代の「知」の東西』

大塚 修

「凄い」。本書を形容する言葉として、この一語のほかに相応しい言葉があるうか。日本が誇るモンゴル帝国史研究者の一人、宮紀子氏が「第二の博士論文」と位置づけ世に問うたのが、本書『モンゴル時代の「知」の東西』である。本書は、著者の「第一の博士論文」『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）出版前後から書き溜めてきた諸論文に書下ろしの諸論文を加えたもので、五部（二〇章三附論）、一一一八頁からなる重厚な論集である。モンゴル時代ユーラシア大陸東西の知の交流の実態について、漢文とペルシア語という二大史料群を軸に、その他諸言語を駆使し説き明かしていく本書は、分量もさることながら内容も規格外である。この大著の章構成は次の通り（括弧内の数字は初出年）。

口絵解説・序にかえて（二〇一〇、一一、一四年、書下ろし）
第一部 日出づる処の資料より

第1章 対馬宗家旧蔵の元刊本『事林広記』について（二〇〇八年）

第2章 叡山文庫所蔵の『事林広記』写本について（二〇〇

八年）

附論1 陳元靚『博聞録』攷（二〇〇九年）

附論2 新たな『事林広記』版本の発見にむけて（二〇〇九年）

第3章 江戸時代に出土した博多聖福寺の銀錠について（二〇一四年）

第4章 『卜筮元龜』とその周辺（二〇一三年）

第II部 大元ウルスの宗教政策

第5章 歴代カアンと正一教——『龍虎山志』の命令文より——（二〇〇四年）

第6章 庇護される孔子の末裔たち——徽州文書にのこる衍聖公の命令書——（二〇〇五年）

第7章 地方神の加封と祭祀——『新安忠烈廟神紀実』より——（二〇〇五年）

第III部 ケシクからみた大元ウルス史

第8章 バウルチたちの勸農政策——『農桑輯要』の出版をめぐる——（二〇〇六、〇七、〇八年）

第9章 ブラルグチ再考——カネとちからの闘争史——（二〇〇一年）

第10章 モンゴル・バクシとビチクチたち（二〇一二年）
第IV部 ユーラシア東西の文化交流

第11章 移刺楚才『西遊録』とその周辺（二〇一〇年）

第12章 フレグ大王と中国学——常德の旅行記より——（二〇一〇年）

附論 マラーガ司天台と『イル・カン天文表』について

(書下ろし)

第13章 モンゴル王族と漢児の技術主義集団(二〇一四年)

第14章 『元典章』が語るフレグ・ウルスの重大事変(二〇一六年)

第15章 ユーラシア東西における度量衡統一の試み(書下ろし)

第16章 ジャライル朝の金宝令旨より(二〇一四年)

第V部 ラシードウッディーンの翻訳事業

第17章 ラシードウッディーンが語る南宋接收(書下ろし)

第18章 ラシードウッディーンの農書に見える中国情報(書下ろし)

第19章 *Tankisiq namanah* の『脈訣』原本を尋ねてーモンゴル時代の書物の旅ー(二〇一〇年)

第20章 *Tankisiq namanah* の「序文」抄訳(書下ろし)

評

書

この章構成を見ただけでも、著者がいかに意欲的に研究に取り組んできたのか、そして、その研究関心がいかに広いものであるのかが理解できるだろう。これまでもモンゴル時代の東西の知の交流の歴史的意義については様々な形で示されてきたが、これほど多岐に亘る主題が一人の手で扱われたことはなかった。何よりも、その実態や意義について、膨大な史料の訳註を示しつつ実証しているという点で本書の価値は高い。まずは、この大著の刊行を心から喜ぶとともに著者がこれまで重ねてきた労に敬意を表したい。本書に目を通した誰しもが感嘆するのは、著者の史料に対する深い愛情と飽くなき探求心に対してであろう。新史料の発見であ

ったり、既知の史料に見られる未知の重要記事の発見であったり、既知の重要記事に対する新解釈であったり、と形は様々だが、ただ純粹に史料を追い求め、読み込むことの大切さ、面白みが改めて実感される。著者の史料に対する姿勢は、時に学界に対する苦言や提言という形をとって現れる。本書は、最新の研究の集みであるだけでなく、提言の書となっている点でも意義深い。以下では、本書の内容および意義を紹介した上で、評者から若干の疑問点を示したい。ただし限られた紙幅のため、本書の魅力をすべて語り尽くすことができないこと、ご諒解いただきたい。

本書の鍵言葉の一つは「連動」である。著者は本書全体を通じて、東西の諸言語で書かれた史料を徹底的に読み込み関係付けていく。その射程は文献に留まらず、写本挿絵や出土遺物などのモノにまで及ぶ。それを一覧できるのが、冒頭の詳細な口絵解説である。各章で使用される重要な図版とそれに対する説明が本論への導入の役割を果たしている。

第I部では、日本に所蔵される、学界で十分に利用されてこなかった幾つかの漢籍が紹介される。主要な題材は、「モンゴル時代以降、ユーラシアの東西で盛んに編まれた」(四三頁)と著者がその意義を強調する文献ジャンルの一つ、百科事典である。第1章では、新出の対馬宗家旧蔵『事林広記』元刊本を糸口に、諸版本の関係を再構成し、第2章では、対馬刊本に欠落していた「官制類」の記事を、新出の叡山文庫蔵『事林広記』写本のテキストから復元する。これに付された二附論では、『事林広記』に加え、その前身である『博聞録』の新版本発見に向けた展望が示される。以上の成果により、日本の王侯貴族、官僚、僧侶の間で

漢籍が流通していた事実を提示し、モンゴル時代の知の東西交流が日本にまで及んでいたことを活写する。現在の中国で存在が確認できない漢籍が日本で発見され、それを材料に新しい事実を説き明かしていく過程は見事である。「書誌学の基礎の上に、広やかな視野をもって地道に各種文献を読み漁り、ひとつひとつの書物の行方を辿ってゆく」(二六四頁)という言葉に裏打ちされた、既知の史料に満足せず、飽くなき探求心をもって文献と対峙していく姿勢は、見做うべきものである。第3章では、一七〇〇年前後に博多で数度出土した大元ウルス起源の銀錠というモノを材料に、東西交流を裏付ける。第4章では、日本における断易関連の写本についての幾つかの発見を示し、刊本だけではなく写本研究の重要性を説く。

第I部の主な題材は新出の史料だが、第II部では、既知の典籍に収録された命令文や関連する碑刻が分析対象とされる。文書研究の現状に対して「まとまった典籍、碑刻資料があるならば、それをまず主軸に研究し、断片は断片としてあくまで参考資料として使用するべき」(二五四頁)と苦言を呈する著者は、典籍中の文書研究の意義を説く諸論文をここに置く。主題は、大元ウルスの道教や儒学に対する政策の実態についてである。第5章では、一三二三年に正一教の総本山で元明善により編纂された『龍虎山志』に収録される命令文の分析から、歴代カアンによる対正一教政策をまとめる。第6章は、儒学を統べる衍聖公に関する論文で、徽州の『新安文獻志』に収録される大元ウルス末期の命令書の分析を主軸に、その実態を活写する。第7章では、同じく徽州の『新安忠烈廟神紀実』に収録される廟の住持の任命や加封の申請

に関する文書の翻刻、訳註が提示される。

ここまでの主な分析対象は東の漢籍であるが、第三部以降、徐々に分析の主軸が西のペルシア語史料へと移っていく。第三部の主題はケシク(親衛隊)の各職掌である(ただしその意義について冒頭ではなく第10章になって初めて説明されるので、少し分かり難い)。第8章では、モンゴル時代の東西で「未曾有の規模」で推し進められたと評価する農業振興策について、大元ウルスで頒布された農書『農桑輯要』の内容、およびその知識の伝播を中心に論じる。ケシクの中でも食事を司るバウルチの役割が詳述される。第9章では、ペルシア語で編纂された、ラシードウッディーン著『集史』(一二三〇七年)に登場する、馬の種類の一つを示す語の意味を、漢籍から再確認し、「東西諸言語の原典資料を自前で扱い、それも可能ならば同時代の最良のテキストに依拠すべき点、痛感される」(四三六頁)と対訳史料の重要性を確認する(この姿勢は本書全体に通底する)。その上で、ペルシア語書記術指南書『書記規範』(一二三六—一六七年)に収録されたブルグチ(遺失物管理官)の叙任に関する文書用例の訳註を提示し、東西に共通する職掌の実態を考察する。第10章では、命令文起草に携わったピチクチ(書記官)の役割を、やはり『書記規範』の訳註を提示することで考察する。ここではその用例を「ウイグル文字モンゴル語文書からのペルシア語訳であり、モンゴル語を仲介として、ほぼ完全同時代のペルシア語・漢語辞典となりうる」(五〇一頁)と評価し、漢文におけるモンゴル語直訳体の議論をペルシア語にも応用する。そして「現存するさまざまな対訳資料を利用し、とうじの翻訳官の方法そのままに、東西の連動を一目

瞭然に訳出」(五〇一頁)する試みとして、直訳体の訳文を提示し「ペルシア語の命令書もどんなに美辞麗句を用い、対句表現・音韻効果に技巧を凝らしていようと、根底のモンゴル語を常に意識すべきである」(五〇二頁)と提言する。この姿勢も本書全体に通底するもので、独特の口調の訳文を随所で披露し、その是非を学界に問うている。モンゴル時代以降のペルシア語史料に見られる、テュルク・モンゴル語起源の単語の存在を過小評価すべきではないという指摘は重要だが、これに対してはすでに、モンゴル語・ペルシア語合璧命令文書の分析に基づき、必ずしもモンゴル語からペルシア語への一方的な対訳関係にはなかつたという反論が出されている^①。

文化交流を扱う第IV部は、言うまでもなく本書の中核を担い、これに最も多くの頁数が割かれている。人の移動やそれに伴う歴史学、医学、天文学などの知識の移動、また度量衡の統一などの問題が、日本までをも射程に入れて論じられる。第11章は、耶律楚材著『西遊録』を主な題材として、モンゴル時代に編纂された旅行記が伝えるユーラシア大陸の情報を紹介する。その上で、中国では散逸してしまった本書が、鎌倉時代の日本に伝えられていた意義を強調する。第12章の分析対象は常徳の旅行記である。これに関連して『儒門事親』最古最良の刊本に確認される、フレグの近臣である萬家奴と傅野なる人物と常徳の面会記事を紹介しているが、ここでペルシア語史料に登場する人名との同定を試み、フレグの近臣の中にキタイ軍団が居たと結論している点は特に興味深い。本章は、二〇一〇年既発表論文の再録という形だが、当時は保留としていた萬家奴の同定にも成功しており、著者がその

後も粘り強く調査を続けていたことがうかがえる。本書は論文集の体裁をとるが、論文刊行後の増補や訂正も多く見られるため、今後は、本書を参照すべきだろう。続く附論では、東西の史料における司天台や天文表の分析に基づいて、曆に確認できる東西の連動を説明する。第13章では、軍医としてクビライに仕えた羅天益の手になる症例・処方箋集『衛生宝鑑』などを糸口に、モンゴルによるキタイ人材の登用とその役割について論じる。キタイ人材については「ペルシア語、アラビア語、テュルク語等の史資料に埋もれているかもしれないかれらの足跡を探し、ひとりでも多く発掘して漢籍の情報と照合、実像をあきらかにしてゆくこと」の重要性が強調されるが(六五〇頁)、前章の紹介で確認したように、本書ではそれが説得的に示されている。総計一六〇頁の分量になる(これは第一部全体の頁数を上回る)第14章では、現在の学界に対する提言が一段と強く表明されている。これだけの紙幅が僅か二〇行の『元典章』の記事の訳註に割かれ、東西の史料を駆使した考察を通じ、情報伝達の実態、および政治・文化の交流について説き明かされる。これまでの訳註には「史牘・モンゴル語直訳体漢文に特有の用語や各案件の時代背景・政治事情に関する解説は、ほとんど見られない」(六七二頁)と自らが強く意識する問題点に対する回答を示す。第15章では、経済や制度に関する命令文の比較・検討がなされていないという問題意識から、『元典章』と『集史』に収録される命令文の訳註を提示し、度量衡の統一に見られる東西の連動を強調する。第16章では、第10章などで扱われた「書記規範」所収の公文書用例に対する実例として、ジャライル朝時代の令旨について、漢籍などを参照しながら

詳細な訳註、新しい解釈を提示する。

第V部の大部分は書下ろしの論文からなり、モンゴル時代の東西交流の「代名詞」とも言うべきラシードウッディーンの翻訳事業が主題とされる。第17章では、『集史』第二巻「世界史」所収「中国史」の種本についての仮説を提示した上で、モンゴル時代における海路の開発、経済の発展に大きく寄与した南宋・東南アジア接取に関する記事の訳註を提供する。第18章では農書、第19章と第20章では医学書に関する文献解題と訳註が提示される。ラシードウッディーンの農書と医学書については、存在こそ知られていたものの、本格的な分析や訳註の作成は試みられてこなかった。内容の一部とはいえそれが日本語で確認できるようになったという一事だけでも、学界への大きな貢献と評価できよう。

本書には、著者の二〇年来の史料調査の成果、それらの徹底的な分析、何より、定説にとられない柔軟な思考から導き出された学説が散りばめられており、その学術的貢献は計り知れない。本書のウリの一つは充実した脚注で、時に論旨とは関係ない事項にまで脚注が付され、新たな論が展開されるなど、それぞれが一つの史料研究に昇華する可能性を秘めたものも多い。著者は論文にするまでもないと考えているのかもしれないが、そこには多くの重要な知見が含まれており、幅広い分野の研究者に役立つ内容となっている。今後、専門や地域を問わず、モンゴル時代を研究する者が必読すべき論文集となるであろうことに疑いの余地はない。

このように大きな学術的意義が認められる本書には、それぞれ

の地域・分野の研究者からの書評が求められるだろう。ここでは、西アジア史を専門とする評者の視点から、幾つかの疑問点を指摘したい。まず本書全体を通読して抱いたのは、断定的口調で披露される見解が、どこまでが既に明らかにされていることで、どこからが新しい知見であるのか、判断し難いという感想である。本書で示される脚注の多くは史料の典拠を示すもので、多岐に亘る内容の先行研究での議論が丁寧に紹介される事例は少ない。例えば、モンゴル時代の東西文化交流を扱った記念碑的研究として参照されることの多々 Thomas T. Allsen, *Culture and Conquest in Mongol Eurasia*, Cambridge, 2001 に対する言及が本書では確認できない。ここでは、本書の重要なテーマである農書や天文学に関する一定の知見も披露されているわけで、先行研究について丁寧な説明があつてこそ、本書の真価を世に問えるのではなからうか。同様にもう少し説明がほしいと感じたのは、参照史料の表記方法についてである。本書のペルシア史料の文献註では、参照した全ての写本の該当箇所を逐一明記する方法がとられている。校訂本には「テュルク・モンゴル語や漢語の固有名詞の解説・批定に難有りなものが多い」(六七三頁)ため(実際は底本の選定やペルシア語の翻刻の面で難有りなものも多いが)、安易に校訂本に頼らず、可能な限り写本を参照していく著者の真摯な姿勢を、評者は全面的に支持している。また、訳文中で逐一明示される写本の異同は、テキストを再構成する手がかりを示すもので、日本で盛んな『集史』写本研究への貢献も大きい。ところが、本書では多くの場合、肝心の参照写本の選定理由が明かされていない。例えば、『集史』第二巻「世界史」所収の「中国史」の翻訳では、

イスタンブール写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kutüphanesi, Ms. Hazine 1653) とパリ写本 (Bnf, Ms. Suppl. persan 1364) の二写本が主に参照されている。前者の写本の「中国史」はともかく、後者は一九世紀後半に書写されたものである。ここで対校本とするのなら、ペルシア語「中国史」現存最古の写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kutüphanesi, Ms. Hazine 1654、一三二七年書写) やパリ写本の親写本となったティムール朝君主ウルグベク (在位一四四七—一四九) への献呈写本 (Topkapı Sarayı Müzesi Kutüphanesi, Ms. Ahmet III 2935) などが相応しいのではないか。さらに、これは『集史』の文献註に共通する特徴だが、校訂本の頁数が一切記載されていない。もちろん安易に校訂本に頼らないという姿勢は重要だが、これでは、写本にアクセスできない読者 (おそらくそれが読者の大多数を占める) には、原文を探し出すために多大な労力が必要となる。例えば、校訂テキストの頁数も示した上で、その「難有りな」箇所を正していくという手法の方が、著者の訳文の価値をより明確にできたのではなからうか。

著者はモンゴル時代のペルシア語史料を読むためには「漢文資料の知識が鍵、必須」(六七三頁) と考え、東西の関連資料を参照した新しい訳文を惜しみなく提示しており、本書は史料集としての価値も併せ持つ。しかし、写本の読解・訳出の際に、ペルシア語に見られる一般的な表現に対して、歴史の意味を付与しようとするあまり、無理のある解釈がなされている箇所が時に見受けられる点には注意が必要である。説明註が付されているものから例を挙げれば、①「nasus 納失失」(一〇二九頁) は「namus 名譽」②「iqat 采邑」(一〇三三—一〇三四頁) は(前後の文字

の組み合わせも変えて)「qat'an 絶対」③「その証拠はなかった。(公務の)新貨幣が出現」(一〇三三頁)④「ān na qadīya ast mashkūk balka wāqī」それは疑わしきことではなく真実のことであった⑤「muhr 封記/印判」(一〇三六頁)は「mir 愛」と読むべきではないか。特に③に対する脚注では、訳文から『珍貴の書』の執筆時期がガザンの治世だと推定されるなど、文献学的考察の論拠とされており、注意を要する。また、モンゴルや東に向けてられた関心に比べて、西アジアに関係する事項についての関心は相対的に低い印象を受けた。例えば、『ヴァッサーフ史』の暦に関する記事の訳註には、天文学書名として「*Takvīm*」なる言葉が見られる(六一二頁)。これに関しては何の説明も確認できないが、これは「タバニー」ではなく、ラッカで活躍した天文学者名「*Battānī Bātānī* (九二九没)」と読むべき箇所ではないか。他にも幾つもの暦や天文学書が登場するが、これらに対する説明もない。評者は、本書ほど詳細な脚注が数多く付されている学術書に出会ったことはないが、モンゴル時代以前の西の事項に関する脚注は少ない。読者の本書への理解を助けるという意味でももう少し語句レベルの説明註があつてもよかつたのではないか。前述の取り違えも説明註を付すことで防げただろう。

モンゴル時代という横軸で世界を輪切りにした上で、知の東西交流を、一つ一つの史料から説き明かしていく本書では、歴史の時間軸という縦軸が捨象されてしまうのはある意味仕方のないことなのかもしれない。しかし、漢籍に対する徹底ぶりに比べれば、ペルシア語史料に関しては、モンゴル時代の文脈での評価が大多数で、モンゴル時代以前から続く西アジアにおける知の伝統に対

する著者の関心の希薄さは否めない。著者は「ありとあらゆる分野のことがらを過去から最新のものまで広くヴィジュアルな状態で知りたいというモンゴル時代特有の精神」(七六頁)とモンゴル時代の意義を説く。しかし、同様の精神は、多民族・多宗教が共存する西アジアでは既に存在していた。例えば、ヤアクービー著『歴史』(八七二年以降)では、質はともかく、ヨーロッパやインド、中国の王が既に叙述対象とされている。また、フアフル・ラーズイー著『知識の集成』(一二世紀末)に見られるように、百科事典を編纂するという伝統も既に存在していた。これをモンゴル時代特有の精神と評価するためには、もう少し丁寧な議論が必要なのではないか。象徴的なのが「巻き狩りを愉しむモンゴル王族」という見出しを付された写本挿絵(口絵27)である。著者は、先行研究でフィルダウシー著『王書』(一〇一〇年)から切り取られアルバムに貼られた「古代ベルシア最初の王カエーマルスの宮廷図」だとされてきたこの写本挿絵を「モンゴル王族の捕虜」の合間の休憩の一場面だと断じる(四一頁)。この画風がモンゴル時代の文化交流の中で生まれたものだという点に異論を挟む余地はない。しかし、これまでに『王書』の一場面だとされてきたのは、それなりの理由と文脈がある。これがモンゴル王族を描いたものだとは断じるには、これまでの研究蓄積を一つ一つ踏まえ、それを丁寧に論破していく必要があるのではないか。

以上、評者の狭い関心から幾つか疑問点を提示してきたが、もちろん本書の学術的価値はいささかも揺らぐものではない。これだけの量の史料を読み込み、一人の手で編まれた本書はまさに偉

業としか言いようがない。随所に披露される新知見は、関係する研究者の奮起を促すもので(もちろん評者もその一人である)、本書が起爆材の一つとなり、実りある議論が展開され、モンゴル帝国史研究が今後益々発展していくことを期待したい。これだけの名著でありながら、著者は随所に研究の展望を示している。著者の今後の研究の行方、そして何より「第三の博士論文」がどのようなものになるのか今から楽しみでしかたない。

① 著者による幾つかの訳注を丁寧に検証した研究に、*ʿImād al-Dīn Šayḫ al-Ḥakamān*、渡部良子、松井太「ジャライル朝シャイフウウイス発行モンゴル語・ベルシア語合璧命令文書断簡2点」『内陸アジア言語の研究』三二、二〇一七、四九一―四九頁がある。ベルシア語文書様式の伝統については、渡部良子「イルハン朝におけるベルシア語文書行政とインシャー術の伝統―十四世紀の書簡術指南書『ジャラールのための贈物』の成立背景とその文書用例の分析―」『西南アジア研究』八七、二〇一七、一―二二頁もある。今後の著者の応答が待たれるところである。

② その過程で、『集史』第二巻「世界史」と同じ構成を持つカーシヤーニー著『歴史精髄』が『集史』に先んじて編纂されていたことを証明した拙稿「史上初の世界史家カーシヤーニー―『集史』編纂に関する新見解―」『西南アジア研究』八〇、二〇一四、二五―四八頁に対する著者の見解が示されている(九二―九四頁)。ただし、拙稿で示した『歴史精髄』が『集史』に先行する決定的な証拠(特に拙稿四〇―四一頁)に関する検討は一切なされておらず、結論に影響するものではないと受け止めている。

③ *Hazine* 1634 写本については、「中国史」について、今のところ最古・最良のテキストと見なす *Hazine* 1634, f. 252b, および *Hazine*

1653, f. 392b の「ミニアチュール」(五九二頁)と評価されているのにもかかわらず、参照されていない。ところで、Hazine 1653 写本の影印版から転載された第12章図3の写本挿絵(五九二頁)についてだが、これは実際には Hazine 1653 写本には存在せず、該当箇所は空白のスペースとなっている。おそらくこの図版は、影印版作成の際に、Hazine 1654 写本の当該場面の写本挿絵を Hazine 1653 写本の空白のスペースに組み込んで作られたものだと考えられる(影印版には 'Bild eingeschoben' という但し書きがある)。影印版の作成者が何故このような行為に及んだのかは理解し難いが、校訂本だけではなく写本の影印版であっても、その利用には細心の注意が必要である。

④ 例えば、同じアルバムに貼られた同一画風の「カイフスラウの悪鬼に対する勝利」を描いた写本挿絵は、同じ『王書』写本から切り取られたものだとされている (E. Sims, *Peerless Images: Persian Painting and Its Sources*, New Haven & London, 2002, p. 302)。また、毛皮を身につけた王が人間と獣を従わせる構図は、カユーマルスの宮廷図として頻繁に見られる構図でもある。ところで、この王に付された 'adam-i said' という説明書きは、本書では「選ばれし者」と訳されているが、これは「神に選ばれし者アダム」と訳すべき定型表現である。時にアダムに同定されるカユーマルスに対して、後世に書き込まれたものだと考えられる。

(菊版、名古屋大学出版会、二〇一八年二月、

上巻五二六頁、九〇〇円+税、

下巻五九二頁、九〇〇円+税)

(東京大学大学院総合文化研究科准教授)